

AsiaWave

 vol.168

1
韓国写真館
金丸知好
KTXの旅

4
特集 対談
ラオス 無頓着の美
安井清子
VS
川口正志

15
Life&Culture
ラフマン・愛
スポーツの夏
桂川唯香
ホームステイがしたいだけ⑤
中園タクヤ
本 [Very Thai: Everyday
Popular Culture]
田淵奈みく
映画『ハティンエの恋』
『リタウテッド 真実の価値』
中川昌俊
アフガニスタン NGOスタッフ
を拉致殺害



ラオスの鞠投げ (川口正志撮影)

12月から1月にかけてラオス北部を旅すると、美しい民族衣装で着飾ったモン族の女性たちが一列に並んで鞠を投げ合っている姿を頻繁に見かける。普段は民族衣装を脱いで普通の格好をしているモン族の女性たちも、モン族の正月が行われるこの時期だけは美しい民族衣装に身を包み、手に鞠を持って町の広場などに集まってくる。鞠投げは男女のお見合いの場で、本来は男女で鞠を投げあうのだが、女性たちが最初に始め、男性陣はあとから加わるよううで、いつも女性の姿のほうが多く感じる。彼女たちが着る民族衣装も最近ではビーズを使った派手な色合いのものが主流で、鞠を投げる度にビーズが揺れシャラシャラと音を奏でる。
写真はラオス北東部、フアパン県サムタイの広場。まだ小さな女の子たちもお姉ちゃんたちと一緒に鞠投げを楽しんでいた。(川口正志)

金丸知好の
韓国写真館

KTXの旅



全面ガラス張りの現代的な釜山駅。ここから韓国高速鉄道（KTX）に乗る。日本のグリーン車に相当する特室（トクシル）は、飲料、新聞、車内ラジオ用イヤホン、車内誌の無料サービスに英語そして日本語、中国語のアナウンスもあり、列車というよりは飛行機で旅をしている感覚に近い。なにしろ最高時速300キロ超で走っているのだ。



釜山駅を出てから2時間半後にはソウル市内を流れる漢江（ハンガン）が見えてきた。速い！ それでも予定時刻の10分遅れでソウル駅に到着。この辺にはまだ「ケンチャナヨ（気にするな）」精神の韓国らしいおおかさが残っている。久しぶりに見るソウル駅もモダンに変身していた。日本の植民地時代に東京駅を模して造られたかつての駅舎はその役割を終え、内部への立ち入りもできなくなっていた。



インド・ネパール・アフガニスタン・バリなどなどからはるばるやってきた衣料品・織物・アクセサリ・楽器・CD・DVD、、、が皆様をお待ちしております



<http://www.harubaruya.com/>

180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-8-3 コスモビル 2階

Phone & Fax. 0422-21-4790

渋谷アムリタ Phone & Fax. 03-3461-6563

吉祥寺別館 Phone & Fax 0422-22-2433

☆はるばる屋通信☆

**インド・バリからオリジナル秋物衣料品
入荷が始まっています。**

**9月27日(土)、28日の代々木公園における
"ナマステインディア 2008"に出店します**

★ 軽井沢店は、9月は毎日営業です ★

**ベリーダンス、インド舞踊のイベントに
商品を持って参加いたします。ご連絡ください。**

ネットでのお買物もお楽しみください！

金丸知好（カナマルトモヨシ）

富山県生まれ。早稲田大学在学中に神戸から上海へ「鑿真号」で渡って以来、船旅のオモシロさにはまり、日本国内や韓国・中国・台湾・ロシアなど外国行きのフェリーに乗船すること多数。稚内からフェリーで訪問したサハリンの見聞録「北緯47度の忘れ物」で徳間文庫10周年記念ノンフィクション大賞を獲得し、以後、船旅をベースにした「航海作家」活動に入る。クルーズ客船で五大大陸と五つの海洋をめぐった経験を生かし、雑誌「クルーズ」（海事プレス社）で「世界の港町、歴史海道をゆく」を連載。また、単行本「アジアフェリーで出かけよう！」（出版文化社）、「フェリーでGO! オモシロ船旅〜日中韓露台」（ユビキタ・スタジオ）の執筆、船旅専門ブログ「航海作家カナマルトモヨシの船旅人生」運営など、船旅に対して情熱的にオモシロ活動中！
船旅専門ブログ「航海作家カナマルトモヨシの船旅人生」
<http://rohnin1966.at.webry.info/>

対談

ラオス 無頓着の美

教育活動家

安井清子



VS



川口正志

写真家

ラオスの奥地のモン族の村で図書館を建て、絵本読み聞かせなどの活動をする安井清子さん（本誌2006年10月号にレポートあり）。ラオスに魅せられその国をくまなく撮り続け、この秋ガイドブックの新作を出す写真家の川口正志さん。ラオスを深く知るお二人に、安井さんの写真展を機会に対談していただき、ラオスの魅力を語り尽くしていただいた。

★おぼつかない交通事情

川口 安井さんはビエンチャンからポーンサワンを通って車で行くんですか。

安井 両方あります。乾期は結構バス移動もしています。一番時間的にロスがないのは夜行に乗って朝5時半から6時半に着いて……

川口 バンコクからですか。

安井 ちがいます。ビエンチャンから夜行でポーンサワンに行つて、1〜2時間の乗り継ぎで7時か8時にバスがあつて、それに乗るとノンヘートに11時か12時に着くんです。それから車を適当にチャーターするか、知り合いのバイクに乗せてもらうか、なんとかの手段で村に入らんです。飛ぶ時は大体時間帯が午後便なんでポーンサワンで一泊してから入らんです。しんどくなると飛ぶ時もあります。雨期はやっぱりちょっと。この前、飛びました。ちょっと恐いかなあと思つたんで。案の定、土砂崩れで道路が止ま

つて、車つまっていたそうです。

川口 ゲオパトゥは2003年に行つてから、行つてないんですよ。ムアンカムまでしか。道はよくなっているんですか。前は崩れたりしてましたけど。

安井 ほとんど悪くないですよ。ただ一部でこぼこになっているところがありますけど。あの辺はあまり土砂崩れとか起こる場所がない。その手前ですね、ビエンチャンからサラブークーンまでの道とそれからポーンサワンへの道が見るからに恐いです。

川口 この前はじめて行つたんです、ポーンサワンの道は。

安井 あそこはあんまり考えずに乗った方がいいですね、落ちそうですからね。（笑）

川口 昔は、本当に危ない危ないと言つていて。最初に行つたのが95年なんで。

安井 その頃は私も行つたことがないですね、陸路では。

川口 ビエンチャンからルアンパバーン

までやたら時間がかかつていて、ルアンパバーンから帰つてくるときに、ポーンサワンに行きたかつたんですよ。サラブークーンでバスが停まつたんで、歩いてた人に、ここからポーンサワンに行きたいんだけどいいたら、やめとけ、ビエンチャンに行け、と。

安井 95年あたりは、たまにファラン（西洋人）とかが旅行で動いているのはポーンサワンで見たことがありますけど、とんでもない泥道だったんじゃないかと思えます。

川口 1号線をぐるぐる回っていくやつを先に行つたんですよ、あつちも厳しかったです。

安井 道は、2000年の春かなあ、そのとき乾季なのに雨が降つたんですけど、ノンヘートまで行つた時は工事中だつてこともあつて、ものすごいドロドロ道で、腰ぐらゐまでうずたかく泥がつまつて、一日で着かなかつたですね。だからもう、そんな感じだと思つていたら、

急に道がよくなった。

川口 あそこは結構外国人旅行者が越えてきてますよね。

安井 いまはベトナムに越えられるので、たまに旅行者も見ますよ。

川口 この間、ムアンカムの三叉路のところの食堂でご飯食べてたら、ノンヘート方面からきれいなミニバスが来て、見たら表示に「ホーチミン〜ルアンパバーン」と書いてあるんです。どうやって行ってるんだろーと思って。

安井 ホーチミンからは、ものすごく遠いですよね。

川口 ホーチミンからずっと上がってきて、ピンを経てノンヘートに入って、ポーンサワンに向かってきましたから、全行程で相当ですよ。

安井 そうですね。そういうことが可能になってきているということですよ。

★結婚はときに大騒動

川口 あと、村の若い子が結構よそへ出て行くんですね。

安井 そう、最近ですね。あんまりまだ出て行かないんですけど、若い子の中で特にビエンチャンで大学まで行ったような子はほとんど帰ってこない。どこかで職業見つけて働けるんなら、家に帰らない。あとは最近ちょっと聞くのは、ひとつは、ルアンナムターの辺り、ゴムの植林がブームで、すごい勢いでみんな植林しているの、そっちにゴムの植林

をしにいつている人が結構います。ゴムが収穫出来るようになるまで5〜8年かかるんですけど、安定した収入がとれそうになったら移住しちゃおうかなという、若い人たちも多いです。

川口 そういう情報って、口コミですか。

安井 口コミですね、完全に。モンのは親族とかの口コミ情報が行ったり来たりしているんです。ルアンナムターにゴムの植林をしにいつている人も結構多いし、あとは数は多くないけど、サイソンブンの金鉱に働きにいつているというのが何人かいますね。

川口 あそこは金鉱は一応動いているんですか。

安井 完全に動いていると思いますよ。

川口 聞いたら、あそこ、あとカムムアン辺りにあつて、ただ、運ぶ手段とか、どうやってお金にするかとか、その辺が難しいという話があつて。

安井 カムムアンのほうはよく知りませんが、ポーンサワン近くの金鉱は個人で掘っているかもしれないけど、サイソンブンのほうはフランスだけの資本がばっちり入つて、そこは完全に動いているみたいです。そこに村の若者が一人ですけど働かに行つて、きついから帰ってきました。元村長はそこにずっといます。やっぱり現金収入を求めた動きがすごく起きています。

川口 この間、ムアンシンへ久々に行つたらタイ・ダムの人がすごく少なくなつていて、みんなルアンパバーンに行つて

しまつている。昔ルアンパバーンのメイストリートつて、モンの人ばかりだったじゃないですか。いつのまにかタイ・ダムの人が出て、どこから来たの聞いたらムアンシンという。

安井 あら、そうなんですか。

川口 ムアンシンで聞いたらみんなルアンパバーンにいつていると。やっぱりムアンシンまでくる旅行者は少ないからルアンパバーンに行くとお金になる。

安井 たしかにそういう動きというか変化は、最近すごく激しい気はします。

川口 ノンヘート辺りの他の種族はどうですか。

安井 タイボンという人たちがいるというんですけど、見かけもどっちかというとかムにちかいか。言葉も全然違う人たちがいますけど、少数ですね。やっぱりすごくノンヘートはモンが多いです。あと、ラオの人もいます。

川口 この間ぼくが行つた時はちょうど1月だったんで、もう正月はたぶん終わつていたと思うんですけど、ポーンサワンからずっとサムヌア、サムタイのほうに回つていくなかで、至る所で鞠投げの儀式をしました(表紙参照)。

安井 そうでしょうね。長いですから、蒙の正月。2週間は遊んでますよね、みんな。

川口 結婚式のシーズンもそのへんですよ。

安井 お正月の鞠投げのときに出会つて、そのあと引つ張つていく。やっぱり

お正月のころは結婚式多いです。

川口 なんかラオス人の家でもハート形の飾りを門のところに飾つて、車の窓から外を見ると、やたらと結婚式をやっている。

安井 多いですね。モンの場合はいつ結婚するかというのは親も全然知らないです。最近は無理矢理というのは通らなくなつてきていますけど、親は知らないですね。息子がいきなり嫁となる女の子を引つ張つてくるというのが結婚だから、女の子のほうはいつ引つ張つていられるというのは本人だつて知らないことが多いです。女の両親は男の方から親戚が来て、あんたのうちの娘さんを嫁にもらうことになりましたからというのをいきなり聞かされびっくりするんです。

川口 モンは、嫁ぐ形なんですか。

安井 男の家にいるんです。

川口 婿入りじゃなくて？

安井 婿入りじゃないです。

川口 普通のラオス人の家つて婿入りっぽいじゃないですか。

安井 そうですね。モンは反対のケースというのは基本的にはないです。

川口 ほかの少数民族の場合だと……

安井 どうなんでしょうね。もちろんビエンチャン辺りだとモンもラオの人と結婚してたり、いますけど、少ないです。すごく少ないです。

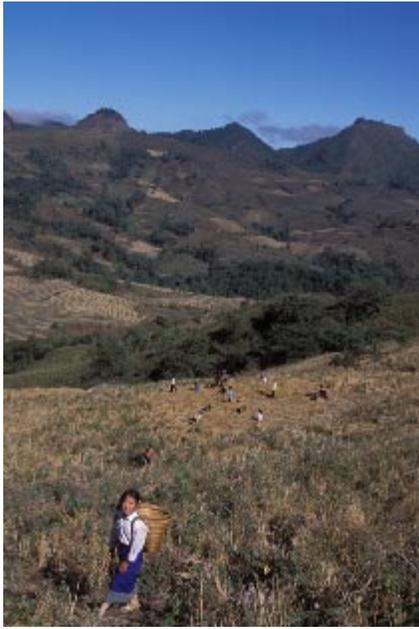
川口 タイではよくそういう話を聞いてるんで、民族を超えて、種族を超えてみたいながあるのかなと思つて見ている

と、たしかに全然聞かないです。あんまり見ないです。

安井 やはりよほど大学まで行きましたとかそういう人は出会いの機会ももちろん多いですけど、普通の村の生活をしている中ではすごく少ないです。ピエンチャン郊外ぐらいだとラオの人と結婚しているという人も少しいますけど。私も村に泊まっていますけど、その家の爺さんは長老なんで、親戚の人が夜中、寝た頃に来て、ある娘を嫁に引っ張ってきたけど、娘の父親が怒ってしまって、嫁にやらないという、なんとかとりなしてくれて。

川口 やっぱりあるんですね、そういうのが。

安井 で、爺さんが寝ぼけながら、よしよし、じゃあいま出て行ってやるからと。夜中にそういう話をしてるんです。お爺ちゃん、女は嫁に行くものなんだから話があったときに行くのがよろしいというぐらいにしか思ってないですけどね。あそこはベトナム国境なんで、ベト



ナムのモンの人とラオス側のモンの人との結婚もあるんです。15、16歳の女の子が、ベトナムのモンの人からせびという話があったって、それで嫁に行ったんですけど、行った先があまり豊かな家じゃなくて、いつも畑仕事をして、学校も辞めなくちゃいけないかったし、実家よりも貧しいうちに嫁に行ってしまうって、帰りたい帰りたいと泣いてるって、お母さんが娘は可哀想なことをしたと言っていました。親族の家長である爺さんが、相手がどういう家であれ話があったんだから嫁に行きなさいと言ったから結局娘を嫁に出しちゃったけど、娘にはもうちょっとと学校を続けてほしかったと、母親は言っていました。決定権が、本人でも両親でもなく親族の家長にある。

川口 モンの社会では離婚とかあるんですか。

安井 ありますね。
川口 やっぱりあまりいいこととはされていいない？

★産業のはやりすたり

川口 安井さんはゲオパトゥウへ行ったら何年ぐらいですか。

安井 97年から行ってるんで、10年になりますね。

川口 10年の間に一番変わったのってなんですか。

安井 ゲオパトゥウに一番始めに行ったとき、なにに感激したかというところ、芥子がとてもきれいだったんです。あの辺はもとの栽培の中心地ですから。それが2000年ぐらいから一時期国連のUNDCPとかが入って、ゲオパトゥウは一切やめました。一番のモデル村になったんです。2000年が最後の。それでそのあと芥子の栽培は一切やめています。あの地域は、もうやめています。だからそれまで長い間の現金収入の重要な栽培作物がなくなつて、みんな、その他の現金収入を求めている。ゴムを栽培する人たちもいるし、去年ぐらいからですけど、トウモロコシがベトナムにたくさん出てるんです。だから商品作物としてのトウモロコシを作る人も増えている。モンが頼ってきた生業がバツと変わっているんで、彼らとしてもこれからどうしているのか、新しい現金収入の道を見つけて、努力している。ラオス全体もそういう社会の流れですけど、変化の時なんだというふうに思いますね。

川口 そういう、なにを作るかというの

は、個人個人ではなくて村単位で決めているんですか。

安井 基本的には個人です。

川口 傲う感じですか。誰かがやってそれを見て。

安井 あの辺りは一時期はアスパラガスだったんですよ。国連が指導して芥子の代替作物としてアスパラガスを作れというって、大々的にアスパラガスを植えさせていた。

川口 村長の家の裏でも見ましたよ。

安井 あれのお爺ちゃんだったんで、モデル農民みたいなかんじで国連にも表彰されているんですけど、あの村でアスパラガスの苗を作って、国連が買い上げて他の村に持っていくような形でやっていて、一時期どこへいってもアスパラガスでした。アスパラガスは植えると十年ぐらいはほっといても株が出てくるので、経済的にもいいと言っていたんですけど、いまは誰も栽培してないんですよ。なんでやらないのと聞くと、いろいろ肥料を入れなくちゃいけないしなかなか大変で面倒くさいみたいなのをいう。アスパラの張本人だった爺さんも栽培を全然していないし、いまは「桃だ」と言っています。(笑) だから一時期あの辺はアスパラ地帯だったんですけど、全然もうそれはなくて、今はトウモロコシなんです。

川口 トウモロコシはすごく需要があるみたいですね。

安井 いいことではない。実家に帰ると言っても実家のそばに小さい家を建てたりして、子連れで来たならその子と一緒に住んでいる人とかがいいます。でも離婚したら、再度結婚するんだしたら、二番目以降のお嫁さんか、いい条件では結婚出来ない。

安井 世界的にもそうですよね。一度JVCの関係でベトナムに行かせてもらったことがあるんですけど、モンの村なんですけれど、どこもかしこもトウモロコシ畑で、びっくりした。しかもモンが作っているトウモロコシは遺伝子組み換えのハイブリッドで、でも毎年種を買わなくちゃいけない。それがラオスに入ってきたんですけど、みんなベトナムの方に売って（1キロ1000キップぐらい）、今年はまだ一生涯懸命植えています。しかも今まで畑でなかったところに植えようとするから除草剤を使い出して、そういうのも全部中国から入ってきている。これまで除草剤は使ってなかったのを、今年から使っています。これからどうなるのかなと不安に思っています。

川口 この間サイニャブリーへ行つて、サイニャブリーでもトウモロコシだと言っていました。

安井 すごい需要があるんでしょうね。焼き畑禁止の方向といってもなかなか。お爺さんは、焼き畑といっても、毎年移動せずにずっと使っている土地に植えてましたけれど、それまでは自分の家の家畜にやる餌としてのトウモロコシを作っていたのが、売るためのトウモロコシをいま作っていますから、畑を拡張するために、除草剤を使い出しているのかな。

——お米も作るんですか。

安井 作っているんですけど、お米は、

トウモロコシを植えてからやる。棚田も作っているんですけど、トウモロコシを植えきつてからやるので、棚田にかかる時期が遅くなっているみたいですね。だからすごく今年みんな忙しいんです。だけれどトウモロコシ枯れてきちゃったとか、言っていたので、うまく収穫が来ないといみんなの努力が水の泡なのでどうなるかなあと。

川口 今年はまた、雨が多いですから。

安井 そうですね。それがあつたみたいですね。

——安井さんもそういうことに「一喜一憂するんですね。」

安井 やっぱり気になりますね。そのお爺さんのうちに泊めてもらっていますけれど、その娘さんやお嫁さんがみんな畑に出払っていて、残っているのは爺さんと婆さんと孫たちと私なものですから、昼は、じゃああんた作れというのが大抵で、私が料理しなくちゃいけないし、夕方みんなへとへとになって帰ってくる。と、やるの面倒くさいから作れとか、結構家事をしなくちゃいけないんです。それでも手伝い程度ですけど、昼間大人を見ないということも多いですから、農繁期は村の生活はなかなかみんな大変です。

川口 人間の原点みたいな暮らしですよ。日本人とかだと、仕事よくわからないうじゃないですか、なにしているのか。生きるために食べなくちゃいけなくてという意味では原点が見えている。

安井 すべてが、薪を背負ってくるころから、水を背負ってくるころから、生きるためにやらなくちゃいけない仕事が多いので、水を取ってくるなんていうのは小さな子供からやりますよね。小学1年生の子は、一昨年見た時は天秤棒でバケツ半分の水運ぶのが精一杯、途中で休みながら運んでいた子が、今年はまだなみと汲んで何往復もするようになっている。今まで末っ子で家の仕事なんて行っていないしお姉ちゃんも畑仕事にだけだと、水汲みはやっておかないといけないという、彼の役割というか、よくこんな重いものを持つなあと思いますけれど、途中で投げ出さずに何往復もする。生きるために身につけていくものですね。

川口 10年ぐらい前にタイでカレン族の村に行つたときに、そこも行くまでにへとへとになるまで川を渡り山を越え行つて、着いたのが夕方くらいなんですけれど、人がいないんです。みんな畑に行つてしまっていて、夕方過ぎて暗くなったら急にみんなが帰ってくる。

安井 不安ですよ、行く方は。ちっちゃい子しかいなかったり。爺さん婆さんしかいなかったり。

川口 見ていると仕事をやっぱり過酷で、朝早くからすごい急斜面を登って行って畑耕してなんてやっている。大変だなと思う反面、日本と違って、親がどう

しているのかを子供がよく見ているんですよ。ちよつといいなと思うんですけど。**安井** 子供がなんでも見ているから、親の仕事からなにかから、とにかく小さい頃からいろんなことを知っている。

——そういうところが今回の写真にも出てますよね。

安井 そういうところを表したいという気持ちには強いんです。日本だとなかなかそういう、生きる力の原点みたいなのが見えないじゃないですか。自分たちもよくわからなくなっちゃってるし。水道がなくて大変ねとか、電気がなくて大変な暮らしという見方ももちろん一般的ですけど、それはそうかもしれないけれど、でもやっぱりそういう原点みたいな暮らしから得る力みたいなことを私は感じるの、そんなことが伝わればいいなという



写真展「子どもの時間 ラオス山の村に生きる」(ニカミノルタフラザ)にて

気持ちがあります。

川口 ほくも前にラオスの写真展をやった、安井さんと同じような気持ちを自分も持っていて、結果としては、結構伝わってはいまずよね。もちろん全く伝わらない人もいます。表面的なことしか見なくて、極端なことを言ったら、安井さんがラオスの山奥の村に行つてやつている、変人なんだね、物好きな人がいるね、で終わっちゃうんですけど、でも大体の人は言わんとすることを結構感じてくれているなど気がします。

安井 いま日本もちよつと立ち止まっている時期でもあるみたいだから、いけいけどんどんではもうない。いま温暖化だとかエコだとか言つて、スピードダウンという感じも少しあるから、やっぱり見直さなくちゃいけないという気持ちを持つている人は多いと思いますよ。

川口 どうしていいかわからない人も多くて、いま日本は経済的にもだめで見通しも暗いから、小さく小さくここを動かないみたいなどころがある。でもできたら若い人なんかは率先して、旅とかもしてもらいたいですね。

★なんにもないラオスのなにかがよくて

——川口さんのラオスとの関わりはどういう道筋を通つてどういうところに来ているんですか。

川口 目をだめにしたのがきっかけです。網膜剥離になったときに、医者から

失明するかもしれないと言われ、治療し、退院して、仕事も休んでいるしするところがないから、以前行つて楽しかったタイに行つたんです。そしたら気圧の関係か、目の具合がまた悪くなつてしまった。

帰ってきたら再剥離、再手術です。それまでアジアって興味なかったんです。それからタイの本なんかを読むようになって、なにかの本に、本当のタイを知りたかつたらイサーンへ行けということが書いてあつて、失明すると脅かされてい

たんで、見えなくなる前にイサーンというところに行つてみたいと思つた。仕事をやめて故郷の八丈島に帰りまして、島に不法就労のタイ人がいたので、仲良くなり、飯場みたいなどころに夜ビールを持つて遊びにいくと彼らはタイ料理を作つていて、イサーン出身の人もいた。その弟さんを紹介してもらい、タイへ行つておそろおそろその番号に電話してみたら、ピックアップトラックで親戚一同で

迎えにきてくれて、乗れといわれて、車で2時間ぐらいのチャイヤブームまで連れて行かれ、家にはもう部屋が用意してありました。日本帰りで比較的裕福な家

だったんであちこち連れて行つてくれたりした。ただ、ビザが切れるんです。そのたびにシンガポールやカンボジア、ベトナムなどに出てたんですが、半年滞在の最後に、一番近いラオスに行こうと思つた。だけどイサーンの友達は大反対、ラオスなんか行つてもなんにもないぞ、タイの30年前だとか言われて、でも一人

でビエンチャンに行つたんです。95年で

安井 じゃあ橋が出来たぐらいですね。
川口 あそこで橋を越えて、入国の手続きをして、タクシーがいっぱい停まつていて、まったく勝手が分からない。ガイドブックもなかったし。

安井 そのころはそうでしょうね。
川口 とりあえずタクシーの運ちゃんの言うままに街まで行つた。橋からビエンチャンの街までのあの間が、たしかになにもないんですよ。見渡す限りの田んぼ。だけど運転手といろいろ話をしながら行つたら、ちょうど11月だったんで、夜

イトルアンでお祭りをやっていると。ぜひ見に行つたらいいよと言われ、夜行つて、そこで他のラオス人と話した。そこからラオス好きが始まりました。みんな初対面だったんだけど、非常にやさしく

安井 95年のタートルアン祭つて、私もNHKの取材の通訳で入つていて、メコン川の取材だったから、あの橋を何度往復したことか。
川口 タートルアン自体はそんなに長々と見ているものでもないけど、近くの食堂に入つて、店員の女の子とラオス語で

対話したんです。そこのお父さんお母さんもいい人で、二日目もそこに行つたら、こつち来て食べなよと言われて、それからそこにラオス人の学生やら欧米人やら来て、みんな話す。ゲストハウスに泊まつていると言つたら、そんなとこ泊ま

つたら高いから来年はうちに来いと、住所を書いてくれるんです。そんなこと初

対面の外国人にするというのはいすごいなあと。ラオスよかつたからもう一回行こうと思つて、2回目はビエンチャンからバンビエン、ルアンパバーンと行つて、戻つてきて。陸路でルアンパバーンは激

しかったです。無茶苦茶でした。
安井 当時、そうでしょうね、93年ぐらいに図書館の仕事で陸路で行きましたけど、カーシーあたりが危ないと言われて

ました。
川口 東南アジアつて寒いと思つてなかつたんで、すごい軽装で行つたら、12月で、しかもトラックバスで、窓ないじゃないですか。凍えました。ルアンパバーンについてのが午前3時半。真っ暗で、当然宿とか全部閉まつている。どうしようと思つて。そのときはカーシーから乗つて来たラオス人の男の子が、うちへ来

いよつて、トゥクトゥクで行つて、貧しい家で、たぶんモン族の家なんです。土間で寝ていた弟をお客さんだからと起こして、譲つてくれたのはいいんだけど、

きびしい寝場所でした。最初のルアンパバーンの印象は、寒くてなにもない、でした。辛かつたです。よもやその後、立て続けに行くことになるのは。東南アジアをいろいろ回つて、帰国して、どこが一番よかつたつて友達から聞かれたんですが、その時既にラオスと答えてましたね。
安井 その頃はなんにもない良さという

か、どこに行ってもなにも整っていないし、かえってそういう感じはあると思います。

川口 全然ツーリストイックじゃないわけです。

安井 そうですね。全然数が少ないし、それ対応に出来ていないから。

川口 逆に今のラオスって、ちよつとびつくりします。楽になって。田舎に行くとなるとやっぱりそれなりの苦労は伴うんですけど、自分が想像していたよりも変化のスピードが速いなど。

安井 いまはバスなんか、バス停に行くところどころこの行のバスというのがずらつとあつて、時間もちゃんと一応わかる。ちよつと前まではどこに行ったらなにがどうあるかなんて全然わからなかった。

川口 わからなかったですね。いつ出発するのか、どうなのか、明日にならないとわからないとか。95年のルアンパバーン行で、ルアンパバーンに何日かいて、こんどまたビエンチャンに帰るわけですよ。昔のバス乗り場の広場へ行ったら、頭を抱えた欧米人がいっぱいいるわけです。言葉がわからないじゃないですか。

よくがタイ語でバスのことを聞いていると、欧米人が藁にもすがる思いで寄ってくる。どうなんだというから、明日にならないとわからない、人が集まったら出発だそうだと、ええーって。当時は本当に旅行するというのはかなりの困難。そのころはまだ警察署への届出も必要だったし。

安井 急激に変わってますよね。92年、93年に常駐していたんですけど、最初の頃は本当にひっそりとして、昼休みとか道路に誰もいないぐらい。今は車がひっきりなしに走ってますけど、当時は車の数も全然少なかったから。ナンバープレートも数えて遊んでたんです。「001」だ、「009」だ、とか。そうか、これ数えればラオスの車の数がわかるんじゃないかって。そうしたら一気にどんどん増えていった。この2、3年、すごいですよ。車の多さ、バイクの多さ、ビエンチャンあたりは空気も悪くなってきたね。そういう対策がされればいいけど、きつとまだそんな状況じゃないから、ほとんど車は多くなつていくでしょう。中国とかの影響もすごいあるし。そういう点で、これから環境的には心配です。

川口 ラオスらしさをなんとか残しておいてほしいという勝手な思いがあつて、発展するというのはやっぱりみんなが豊かになりたいと思つているから止められないとは思いますが、ラオスの個性がなくなつちゃうとタイと一緒になつてしまふ、結果として魅力を感じなくなつちゃうのかなという気がします。いまはみんな外国人慣れしているというか、特にそんな珍しいものじゃなくなつてきたけど、97年ぐらいにシエンクワンに観光で行つて、ぶらぶら歩いていたら、子どもたちが僕を指さして、「アメリカ、アメリカ」というんです。びつくりしま

した。どこがアメリカ人だと。
安井 それはモンの人なんかも、私はとりあえずモン語を話すけど、他の日本人とかが行つたときに、あのロシア人？とか言つてました。

★モン族の村の図書館の現在

——安井さんの図書館のことをちよつとつかがいたいんですけど、完成して、いまだという状況なんですか。

安井 建つたのが去年、2007年3月で、それからは村の女の人が二人、図書館スタッフになっていきます。一人は六人の子持ちのお母さん、一人は21になったくらいの子の未婚の人で、その二人が当初からやりたいと入つてきて、トレーニングといつてもたいしたことはないんです。本の登録とか、貸し出しの仕方とかをやつて、仕事をしていきます。本は日本の絵本とラオスの本と入つてます。日本の本は訳があるものもあります。若い方はラオス語が読めますが、いくら文章がラオス語で書いてあつてもモン語で書いてあつても小さい子は読めませんから、子どもたちにはとにかくモン語でお話ししてあげないとだめだということ。私は強調して、私も下手なモン語ですけどモン語でずつとお話をしていって、それを彼女たちも見聞きして覚えてきたりとか、一人は自分でラオス語で読んで、モン語で話すというふうになつてくるんです。週二回、水曜と金曜だけ開いていま

す。彼女たちも同じようにいま忙しい農作業をやっているの、毎日というのは無理なものです。最初は土日に開いたらいいんじゃないのと言つたら、そんなことやつたら誰も来ないと。土日は子供たちが親と一緒に農作業に行くので、やっぱり平日の方がいいということになりました。学期前のチビは開いた途端、朝から来てますし、昼休みから夕方までの時間は小学生が来るんです。金曜日の午後は麓の中学に行つて戻つてきた子たちが来て本を借りていったりということもありました。あの山奥の状況にしてはなんとか活発に続けてきてるなと思います。できたからさよならということだときつとどんん尻すぼみになるので、2、3ヶ月に1回ぐらいは私も行つて、本の修理と一緒にやつたりとか、少しずつ新しい本を入れて新しいお話をに入れていかないとけない。彼女たちもなになつたらいいか

ラオス 山の子ども文庫基金

安井清子さんの活動を支える基金です。
年会費 一〇二〇〇〇円
年数回、活動報告を送付します。
郵便振替 〇〇160-6-482100
ラオス山の子ども文庫基金
電話/FAX 03-3398-2182
メール kiyokoy@laotel.com
http://www7a.biglobe.ne.jp/~laosyamanoko



完成した村の図書館



わからないんですよ。手探りで少しずつ新しいことをやっていかないと、だれてくる。子供相手にお話をずっと読んであげるといのはなかなか大変なことなのです。ただというわけにはいかないんです。一日畑作業を手伝ってもらってお金と同じぐらいなんですけど、払ってるんですけど。そういうこともあって定期的に行っています。図書館だけあっても人がいないと機能しない、いるといってもまだ育ち切っていない状況なので、ここはできたから次の村に行こうという気持ちはないんですけど、あの村だけに本があつて周りになんにもないという状況です。ですからこれは他の村にも広げていいのかなと、ふもとの村の小学校に本を寄贈して、先生を集めて読み聞かせのワークショップをやったりしていますが、そう簡単に

はいきません。この秋は図書館のスタッフ二人と一緒に周りの村を回ろうと言っています。
川口 いま本は何冊くらいあるんですか。
安井 300ぐらいですかね。中学高校まで学校に行っている子は結構ラオス語を読むので、大きい子はラオス語で読んでいます。小さい子はモン語でお話してあげないと。ラオスで、ラオ以外の民族の図書館活動というところ、どうしても本がラオス語になるから、そこが難しいところなんです。もちろんラオスの国語で小学校でもラオス語を学んでますからそれはそれでいいと思うんですけど、入り口のところで民族の言語でお話をしてあげるという人がいないと図書館活動は難しい。小学校3、4年でもなかなか読め

ない。小学校5年から中学校になると結構読み出すんです。だから無理矢理ラオス語で読みなさいといわなくても、本が好きな子は読むようになるなとは思いますが。
川口 表記はモンの単語をアルファベットで？
安井 ノンヘート辺りは、モンラオフォーンというラオス文字で書くモン語の書き方があるって、みんな結構使っています。ただ、ピエンチャン辺りのモンのところに行くと全然わからないんです。ノンヘート辺りは共産圏として早いですから、多分戦争中から使われていて、一時期教科書もあったんです。小学高学年や中学生の子どもたちもモン語で「ラブレター」なんて書いてるのがあるんですけど、ラオ語表記のモン語で書いてますね。モン

語表記については難しいところがあります。
川口 独自の文字がないとやはり難しいものがありますね。
安井 全然言葉が違うから、たとえばモンのお話なんかを本にしようと思うときにラオス語に訳すことで他の民族の人にも読めるんですけど、言葉の響きが違うからやっぱりモン語でも表したいなと、私なんかはそういう気持ちが強くて、でも私が知っているのはアルファベット表記のモン語なんです。少数民族の言語表記に対してはいろんな受け取り方があると思うんですけど、正式に認められていくわけじゃないんで、その辺りはちょっとむずかしいところですね。

★あなたは何族？

川口 ラオスでもいろいろな民族がありますけど、それぞれが自分たちの民族の誇りをもって主張してきますよね。カム族とかタイ・ダムもそうでしたし、ブーノイも。バスに乗っていると一緒になる。言葉が違うんで、何族なのか聞いたなら、みんなして自分たちの言語を教え出して、三種類もいっぺんに覚えられないし、ただ自分たちに興味を持ってくれる人に対する嬉しい気持ちが見られます。
安井 ラオスって面白いなと思うのは、小さな国なのにすごく多民族で、うまくそれぞれの民族が誇りを持っているという事になれば素晴らしいことだなと思



ツパ風の建物ができる。

安井 住みにくいでしょうね。

川口 住みにくいです。

安井 気候に合わないからね。

川口 前にラクサオで泊まったゲストハウスはあるとき行ったらホテルに変わっていて、かっこいい鉄筋コンクリートになったんですよ。泊まったら電気が停まってしまつて、窓が小さいから暑くてしようがないんですよ。風通しが悪くて。木の家って夏場涼しくて冬もそこそこ暖かいという知恵で作っているんだけど、屋根をトタンに変えただけで、もう辛いですね。雨漏りしないしずっと使えるし楽なんですけど。

安井 モンの家なんかはやっぱり伝統的に移動してきた人たちだから、だいたい板で囲ってあって、窓がないし、居心地はよくないんです。家は、土間で、一日で建てちゃいます。彼らは夜寝て朝起きたら畑に行くから家にいる時間が非常に少ない。そこに長く暮らそうと思うと

結構居心地はよくないんです。でもいざ引越すとすると、柱も取って板もはずして、全部材料ごと引越しますから、移動式の家なんだなと思います。もともとの生活形態が移動というのが基本にあった、定住ということがあまり念頭になかった人たちなんだろうなというふうには思います。そこに定住しようという人たちは、村だと鉄筋じゃないけど煉瓦を使つて

建てる。そこまで作ると、なかなか動きたくないだろうなと思います。それまでの生活の形態が家なんかには現れる。定住を考えている家ではないです。家に一日中いて本でも読んでゆっくりしようというには全然不向きな家ですから。

川口 サムタイに行ったのは、水車が見たかったんです。水車がいっぱいあります。三連水車とか四連水車とか、竹製の直径3、4メートルの。

安井 水揚げて灌漑にしているんですね。

川口 あと場所によって電気を作つたりもしているみたいです。モーターを逆回転させて。この間行った時は乾期だったんで、ちょうど解体していて。あれは一回全部解体して材料をとっておくんです。それでまた組み立てる。すごいものです。

安井 中国でも見ました。

川口 フローティング・ブリッジを渡つて対岸を見たら作業してるんですよ。あっちに行こうと思つてまた橋を戻つてそ

っちへ道を探しながら行つたら、もう一個だけになっていて。最初三つあったんですが、だんだん外して。よくできてましたよ、ちゃんと川から水路を板で作つて、そこでちゃんと回るようになってる。

安井 ラオスはなんにもないとかいっても人々が手に持っている技術はすごいなあと思うことがある。モンの村もなにもないですけど、やっぱり農具からなにか鍛冶仕事で全部自分たちで作つてますから。分業してないといえそうですけど、ナニ屋さんというのがあるんじゃないかと、みんなが鍛冶屋だし、みんなが農家だし、みんなが畜産もやつてるしというところで、みんなが自分でやつてるから、規模は小さいけどなんでも暮らしていけるといふようなことをずっといままでの暮らしの中で身につけてきている人たちだから、そういう点はなんにもないけど何でもやるから、すごいなということはよく思いますね。

川口 それがでも彼らにとっては当たり前で、逆に僕らなんかそんなところに何かされて、なにも作れないわけですよ。なんでできないのと言われちゃう。

安井 日本人は技術があると言われても、私には技術がないし、どこの日本人って思っちゃうわけです。

川口 そういう知恵は彼らの方が上だなあと思いますよ。

2008.8.19 新宿にて

取材・構成 池田康

安井清子 (やすい・きよこ)

東京生まれ。国際基督教大学卒。おはなしきゃらばんの活動を経て、85年よりNGOスタッフとして、タイのラオス難民キャンプで5年、ラオスで2年、子ども達の為の図書館活動に携わる。モン族の民話、文化、生活の記録、難民になったモンのその後の生活も追っている。著書に『チューの夢トウの夢』(福音館書店)『森と友だち川と友だち』(草土文化)『ラオスすてきな笑顔』(NTT出版)など。



川口正志 (かわぐち・まさし)

1963年東京生まれ。TV局スチールを経てフリー。1995年よりラオスに通い、現地の写真を撮り続けている。2002年には東京と大阪で写真展「LAO BREEZE ~ラオスの風に吹かれて~」を開催。現在は国内外問わず、人々の生活や暮らしをテーマに取材、撮影、執筆活動を行っている。実家は東京都八丈島。著書に東京都の島々に移住するためのノウハウ本『島で暮らしたい!』(彩流社)がある

祝！開館一年

ゲオバトウ村訪問記 2008年4月

鈴木晋作

私は、図書館が完成して約一年ぶりに、茅葺き作業の時期に合わせて、乾季の終わりに村を訪問しました。

今回の訪問の目的は、①建設後一年目の点検、②茅屋根の葺き替えと改良、③村の人の今後の話し合い、の3点でした。数日間の短い滞在でしたが、長く留守にしていた者にとっては、多くの変化を感じます。

懐かしい顔の幾らかは、見当たりません。もう村を離れた人、これから村を離れる人もあり、寂しい気持ちはありますが、そ



作業を終え、みんなで記念撮影

の門出を見送ってあげなければならないのは、村に残った人々にとって、誰しも同じです。より良い条件を求めて、新天地に旅立つのですから。

また、村の人の関心のある話題も以前と異なり（生産率の高い飼料用のハイブリッド種のトウモロコシ、新しい農業など）、村の中にも農業の機械が増えたように見えます。

①図書館の建物の状況ですが、建物の状態は、とても良く、スタッフ二人の掃除がとても丁寧に行われているのが一目見てわかります。床なども子どもの足の裏の「天然のワックス」と雑巾拭きのおかげで、つるつるになっています。一年前より却って、綺麗に見えるくらいでした。

建具の細工など、不具合のあるところは、村の人が補修していたようです。湿気が多いところですから、その程度は予想していました。

②茅葺きは、風雨と紫外線にさらされ、一部室内から「空が見える」というところが何点かあったようですが、まだ雨漏りはありませんでした。

この建物では、人が生活することで火を起こし、燻す事がないので、三年で葺き替えになります。二年経った今年の春に葺き替えとなりました。今度は、三年以上の耐久性を期待して、より密に葺くことにし

ました。

茅を集めるのは、村の共同作業として、各家族から三、四枚分を山から刈って来て、シート状に編んで、提供してもらいました。作業日の前日まで、20枚程度しか集まっていなかったのですが、前夜に村長たちに呼び掛けてもらったこともあって、その日の朝には、続々と集まって来ました。茅葺き作業に当たっては、延べ40人程度の人が参加して賑やかに行いました。

改良点として、屋根に半透明の波板を敷き込みました。風雨から建物を守るために軒が深く、曇天のときは、室内が少し暗くなってしまうので、安定した天光光を採り入れたのです。これは、安井さんとスタッフの要望から出てきたアイデアです。

付け加えて、オンドルの床の紙をモンの和紙で張り替えて、一新しました。後日、安井さんと子どもたちが楽しく床に絵を描いたようです。

③村滞在の最後の晩に村の人々に集まってもらい、図書館の意義を再確認しつつ、これからの図書館のあり方を話し合いました。

話し合いの中で、村の人たちから新たな相談がありました。それは、図書館に併設する村役場の建設（隣村のいくつかを含む）に協力して欲しいということです。

今の図書館は、容積としては最小限で、限の機能を果たしていますが、もともと空間として、学習室（小中学生の自習、女性の識字教室）やコミュニティセンターとして大人の利用を意図していました。そして何年か後に、図書館が軌道に乗り、更にその多くの機能が果たせる大きな空間が必

要であれば、大きな家を建てようということでした。

そこで、我々の提案としては、村役場を対外的な「お飾り」にするのではなくて今の「お話の家」と隣接した、実用的な「みんなの大きな家」にすることです。つまり、村の公務にのみ使われて、日常は使われない、利用の手続きが難しい、管理が厳しいということでは困ります。ですから、公務との領域分けの平面計画と管理、施設の運営計画にも注意が必要です。大きいと言っても、床面積は60㎡強（現在の図書館は約25㎡）の平屋です。

建設に当たっては、彼らも実際には、畑の仕事もありますから、労働提供と賃労働を組み合わせた建設組を編成することが、最善かと思えます。

しかも村の人たちは、「土」を使った建物がいいと言います。それは、人好きのモンの人たちが私たちを村に長く滞在させるという方便なかもしれません。彼らが生活に「土」の技術を導入し、住環境の快適さ、経済性を期待しているのではないのでしょうか。

ついでに図書館にまつわるエピソードをお話しますと、何でも、イランの方が見に来られ、土と漆喰の壁に感心して帰られたそうです。イランには、土や石灰の技術と伝統的建築が残っていますから、そう褒められると、この小さな建物も少し凛として感じました。

それはどうあれ、村の中にあるシンボルということでは、その役割を果たしているかと思えます。昨年の「お話の家」の建設時のことは、私もまだ整理できておりませんので、改めて報告させていただきます。